

13 山査子^{さんざし}

I

一本の山査子^{さんざし}があります 見るからに老いさらばえて
その昔若いころがあったとは
実際とても思えないほど
見るからに老いさらばえた姿です
二歳の子供の丈^{たけ}ほどもなく 5
この老山査子は まっすぐ立っています
葉も 針^{とげ}の棘もなく
瘤^{こぶ}のような節々^{ふしぶし}のかたまり
不幸な寄る辺なき身
それはまっすぐ立って 石のように 10
苔^{おお}で覆われています

II

天辺^{てっぺん}まで まるで岩か石のように
それは 苔で覆われています
さらに 物悲しげに群がった
重く房なす苔が張りついているのです 15
地面から苔の群ははい登り
この哀れな山査子^{から}に絡みついているのです
あまりにきつく張りついて
まるで 苔の群がわざと
山査子を地面に引きたおし 20
力をあわせて この哀れな山査子を
葬り去ろうとしているようです

III

はるか 山のいちばん高い尾根
しばしば 荒れ狂う冬の嵐が
大鎌のように切りつけるところ 25
雲^{つらぬ}を貫き 谷から谷へと吹き抜けるところ
山道から五ヤードと離れぬところに

この山査子が 左手に見えてきます
そしてその左 三ヤードむこうには
水が干上がることの決してない 30
小さな沼池ぬまちがあります
端はしから端まで測ってみると
長さ三フィート 幅二フィートの池でした

IV

さらに この老いた山査子のすぐかたわらに
鮮やかな美しいものが見えます 35
高さわずかに半フィートの
それは きれいな苔むした小塚こづかです
さまざまのすばらしい色模様
この世のすべての色彩が 一面を覆っています
まるで見目うるわ麗かたしい女性の手で編まれたような 40
見事な苔の織物が
敷きつめられているのです
そしてまた まこと色濃い朱色に染まった
目も鮮やかな苔花こけばなが咲いています

V

黄緑色と 明るい緋色ひの 45
ああ それはなんとすばらしい色模様でしょう
釘状くぎに 枝状えだに 星状ほしに
緑と赤と真珠の色模様
山査子のすぐかたわらの
色鮮やかに美しく染めあげられた 50
苔むしたこの小塚は
赤子の墓ほどの大きさです
いかにもまさしく 赤子の墓の大きさです
しかし 決して何処どこを探しても
この半分も美しい赤子の墓はありません 55

VI

さて もしもこの老いた山査子と
この池と美しい苔むした小塚を ごらんになりたければ
その山を横切る頃あいに気をつけて

うまく時間を選んでください
というのよ よくそこに 60
赤子の墓ほどの小さな塚と
先ほど申したあの池との間に
ひとりの女が 緋色の衣をまとってすわっています
そして女は 泣きながら 眩つぶやくのです
「ああ かわいそうに ああ かわいそうに 65
ああ ああ ああ かわいそうに」

VII

昼も夜も 一日じゅう
不幸な女は そこにゆきます
女のことは 星という星
吹く風という風に 知られています 70
そしてそこで 明るい日の光が空に射すときも
旋風かぜが丘に舞うときも
霜降る大気がしんしんと刺すときも
女は 山査子のかたわらにすわって
泣きながら眩つぶやくのです 75
「ああ かわいそうに ああ かわいそうに
ああ ああ ああ かわいそうに」

VIII

「しかしどうして そのように昼も夜も
雨のときも 嵐のときも 雪のときも
そのように 寂しい山の 頂いただきに 80
その哀れな女は出かけるのでしょう
明るい日の光が空に射すときも
旋風かぜが丘に舞うときも
霜降る大気がしんしんと刺すときも
どういう理由わけで 女は山査子のかたわらにすわって 85
そして 泣くのでしょうか
どうして どうして どうしてでしょう
女が 悲しい泣き言を繰り返すのは」

IX

わかりません できればお話したいのですが

というのは 誰もほんとうの理由^{わけ}は知らないのです 90
でも もしもご自分でその場所を見なければ
女が出かけるその場所を
赤子の墓のようなその小塚を その池を
そんなにも老いさらばえた山査子を見なければ
めったに閉まっていない女の家^の戸口を通り過ぎ 95
女が小屋にいるのを確かめたうえ
それから急いで その場所に行つてごらんなさい
女が山にいるときその場所に
あえて近づくものがあるとは 聞いたことはありません

X

「しかしなぜ 山の頂に 100
その哀れな女は出かけるのでしょうか
どんなに 星が空にかかっているときも
どんなに 風が吹くときも」
いいえ いくら考えても 無駄^{むだ}なこと
わたしが知ってるだけはお話します 105
しかし 山査子のところに
そして すぐその先の池のところまで
行つてごらんになつてはいかがです
恐らく そこにいらしてみれば
女の身の上^が 少しはおわかりになるかも知れません 110

XI

できるだけのお手伝いはいたします
あなたが山に出かけるまえに
あの寂しい山の頂に出かけるまえに
わたしの知ってるだけはお話します
その女が (女の名前はマーサ・レイ) 115
^{まこと} 眞実 乙女の眞心で
スティーブン・ヒルとつきあってから
今ではもう かれこれ二十二年になります
マーサは 陽気で快活でした
スティーブン・ヒルのことを思えば 120
マーサは いつも幸せでいっぱいでした

XII

二人は 結婚の日取りも決めていました
二人が結ばれるはずの日の朝を
なのに スティーブンは別の娘と
別の契りを結んでいたのです 125
そして その別の娘と教会へ
つれないスティーブンはゆきました
哀れなマーサ！ その悲しみの日に
人の言うには 残酷な残酷な火が
マーサの体内に送り込まれて 130
手足は 燃え殻のように干涸びて
頭は 火口のようになったといひます

XIII

うわさでは それからまる六月も経ったころ
まだ夏の葉が青々としていたころに
マーサは 山の頂にゆきだしたので 135
そしてよく そこにいるのが見かけられました
お腹に赤子がいたといひます
もはや 誰の目にも明らかでした
子供が宿って マーサは気がふれました
それでも 耐えがたい陣痛に 140
しばしば 正気にかえって苦しみました
あの血も涙もない父親！ 彼こそ死ぬがよかったにと
ああ 何万回もわたしは思ってきました

XIV

狂った頭で うごく胎児と情を交わす姿の
なんと痛ましいこと 145
頭がそんなにも荒れ狂っては
なんと痛ましいこと そうですね！
先のクリスマスに この話が出たときに
シン普森百姓さんは力をこめて言いました
女のお腹で その赤子は 150
母親の心の狂気を治して
ふたたび正気に戻した と
それで いよいよ産期が近づいたときには

表情は穏やかで 意識は確かなものだった と

XV

それ以上は知りません できれば知って 155
すべてをお話したいのですが
というのは その哀れな赤子がどうなったか
知ってるものはいないのです
はたして生まれたのか どうなのか
語れるものはいないのです 160
はたして無事に生まれたか 死産だったか
ほんとに誰も 知っているものはいません
しかしマーサ・レイがこの時分
しばしば山に登っていたことは
確かに よく覚えている人もいます 165

XVI

そしてその冬じゅう 夜になって
風が山の頂から吹きおろすころ
たとえ暗闇を手探りでも
墓地の小道のところまで いってみるだけのことはありました
山の上から吹きおりてくる泣き声が 170
しばしばなんども聞こえてきたのです
ときにはそれは 明らかに生きたものの声でした
ときにはそれは 多くの人が誓っていますが
死んだものの声でした
うわさはともかく わたしには 175
その声が マーサ・レイと関わりあるとは思えません

XVII

しかし彼女が 老いた山査子のところに出かけ
あなたにお話したあの山査子ですが
そこで 緋色の衣をまとってすわっているのは
誓って本当の話なのです 180
というのは ある日望遠鏡を手に
広く輝く海原を見ようと
それはまだ こちらに来て間もないころで
マーサの名前を聞く前のことですが

その山に登ったことがありました 185
嵐が来て 膝から上は
何も見えなくなってしまいました

XVIII

霧から雨 雨から嵐へ
物陰ひとつ 雨宿りする囲いひとつなく
そのうち風が それは 190
ほんとうに十倍にも強く吹きだしました
見渡すと 突き出た岩場が 確かに見えたと思い
そこで 降りしきる雨のなかを
岩場に身を寄せようと
のめらんばかりに走ってゆきました 195
そしたら 紛れもなくそこには
突き出た岩場ではなくて
ひとりの女が 地面にうずくまっていたのです

XIX

声も掛けませんでした 顔は見えました
女の顔 それでもう十分でした 200
背をむけると 女の泣くのが聞こえてきました
「ああ かわいそうに ああ かわいそうに」
そういう理由で 月が晴れた夜空を半周するまで
女はそこにすわっています
そして 微風に 205
池の水面が揺れるとき
村じゅうの誰もが知っているように
女も身を震わせて 泣くのです
「ああ かわいそうに ああ かわいそうに」

XX

「でも その山査子は その池は 210
その苔むした小塚は 女と何の関わりが
その小さな池の小波たてるそよ吹く風は
女と何の関わりがあるのでしょうか」
わかりませんが ある人は
女が赤子をその木に吊るした と言っています 215

またある人は すぐその先の池で
溺れ死おほなせた と言っています
しかし みんなが口をそろえて言うことには
あの美しい苔むした小塚の下に
赤子は埋められたのです 220

XXI

聞くと ころ その哀れな赤子の血しずくの滴に
苔あかは深紅く染まっているとか
しかし 生まれたばかりの赤子をこうして
女が殺せるなんて とても考えられません
ある人の話では もしも池に出かけて行って 225
じっと目を凝こらしていたら
やがて赤子の姿が見えてきて
赤子が そしてその顔まではっきり見えて
そのうえ こちらを見つめるそうです
こちらがじっと見つめていると 230
かならず赤子も 見つめ返すそうです

XXII

女は法の裁きを受けるべきだと
いい張る人もありました
そして 赤子の亡骸なきがらを
鍬くわで掘り起こそうともしたのです 235
ところがそのとき 美しい苔むした小塚は
みんなの目のまえで揺れ動きだしました
五十ヤードあたの辺り一面
地面の草も揺れました
とにかく あの美しい苔むした小塚の下には 240
赤子が埋められていると
今でもみんなは断言します

XXIII

どういう理由わけかはわかりません
しかし確かに 山査子には
重く房なす苔が張りついて 245
地面に引き倒そうとしています

そしてこれだけは確かです なんどもなんども
女が山の上にいるときに
昼間でも あるいは静かな夜に
すべての星が光り輝くときでも
わたしは 女が泣くのを聞きました
「ああ かわいそうに ああ かわいそうに
ああ ああ ああ かわいそうに」

250

(山中光義訳)